

知求会ニュース

2017年12月

第64号

◎ ラモン・マグサイサイ賞受賞、おめでとうございます！

元非常勤講師をされていた石澤良昭先生（上智大学アジア人材養成研究センター所長、元上智大学学長）が、アジアのノーベル賞と呼ばれる「ラモン・マグサイサイ賞（Ramon Magsaysay Award）」を受賞されました。受賞理由は、カンボジア内戦時代の頃より、「アンコール・ワット遺跡保存修復は、カンボジア人の手でなされるべき」との信念のもと、同遺跡を守るカンボジア人専門家の人材育成に尽力したことが評価されたもので、8月31日にマニラで授賞式が行われました。

◎ 他大学院・博士号取得、おめでとうございます！

鳥日哲 (*Urija*) (国際学研究科国際文化研究専攻・第5期生)さんが、2012（平成24）年3月23日(土)に一橋大学大学院言語社会研究科で、以下のように学位を取得されました。

学位名：博士（学術）

学位番号：甲第 x x x x 号

学位授与機関：一橋大学

学位授与日：2012年3月23日

論文名：中国語を母語とする日本語学習者の語りの談話における表現と構造

事務局の調査で、以上の1名の修了生の動向がわかりました。博士号取得者の情報を知っている方は大学院同窓会までお知らせください。

これまでの国際学部・国際学研究科(修士課程および博士前期課程)出身者の学位取得者は、博士(国際文化)(東北大学)2名・博士(文学)(名古屋大学)/(筑波大学)/(東北大学)3名・博士(人文科学)(お茶の水女子大学)1名・博士(人文学)(パリ東大学)1名・博士(芸術学)(筑波大学)1名・博士(社会学)(一橋大学)1名・博士(農学)(東京農工大学連合大学院)2名・博士(国際学)(宇都宮大学)14名・博士(経済学)(名古屋市立大学)1名・博士(観光経営学)(慶熙大学校)1名・博士(人間・環境学)(京都大学)1名・博士(学術)(杏林大学)/(筑波大学)/(東京大学)3名・博士(国際開発学)(名古屋大学)1名・博士(国際関係・紛争・平和学)(キングス・カレッジ・ロンドン)1名の計33名です。

◎ 博士前期課程、修了おめでとうございます！

2017（平成29）年9月29日(金曜日)午前10時から峰ヶ丘講堂にて、2017年度秋季学位記授与式が開催されました。今回の修了者は、国際文化研究専攻の第16期生の王立明さんでした。

◎ 9月入試合格結果

国際社会研究専攻 一般 1名・社会人 0名・外国人 3名 計4名
国際文化研究専攻 一般 0名・社会人 0名・外国人 4名 計4名
国際交流研究専攻 一般 4名・社会人 0名・外国人 8名・
国際交流・国際貢献活動経験者 0名 計12名 合計20名

◎ 訃報

元国際学部事務長の増淵勘さん(享年72歳)が2017年10月13日にご逝去されました。
ここに謹んでお悔やみ申し上げます。

◎ 放送大学栃木学習センター面接授業

1. ドイツ語を学び、ドイツを知る。 2017年11月25日(土)・26日(日)1時限～4時限
渡邊直樹先生(国際学部名誉教授)
2. ことばと文化について考える 2017年11月11日(土)・12日(日)1時限～4時限
佐々木一隆先生(国際学部教授)

◎ 掲載記事紹介

1. 朝日新聞 朝刊(平成29年12月3日発行)31面に、「この人 このテーマ」コーナーで「大学への扉開き多文化育む」と題した「国立初の「外国人生徒入試」導入 目的は」の内容で、田巻松雄先生の記事が掲載されました。

◎ 国際学部だより

1. UUnow(平成29年11月20日発行)12・13面の「研究 keyword」コーナーに、「あきらめずに考え続ける「戦争と平和」「人間の安全保障」「国家と犠牲」と題して、清水奈名子先生の記事が掲載されました。

○ 『外国文学』休刊のお知らせ

宇都宮大学外国文学研究会が編集発行してきた『外国文学』(ISSN 0288-3309)が、2016年12月20日発行の65号をもって休刊となりました。

研究室訪問 48 第9号から国際学研究科に関する内外の先生方に寄稿をお願いしたコーナーを設けました。

「国際学部と歩んだ22年間」

中村祐司

みなさん、こんにちは！ 昨年(2016年)4月から所属が地域デザイン科学部に変わり、今年の10月からは研究室も陽東キャンパスに移りましたが、元気にやっています。

思い返せば、今から 23 年前の 1994 年 10 月に国際学部が発足し、翌年 4 月から学生を受け入れて以来、学部においては、行政学、地方自治、余暇政策、英書講読といった科目を担当してきました。また、1999 年 4 月に大学院国際学研究科博士前期課程が設置されてからは、比較政策研究という授業科目を、そして、2007 年 4 月に開設した博士後期課程では、ネットワーク・ガバナンス分析論という科目を担当するようになりました。これまで国際学部一筋の四半世紀であった、といったら大袈裟でしょうか。

何だかいきなり堅苦しい授業科目を並べてしまいました。この間に私の研究室に集まってきた演習（ゼミ）生、卒論生、院生は、国際学部のイメージからすればやや傍流に位置していたかもしれません。というのは、この学部の場合、当初は海外協力事業に従事したい、ぜひ留学したい、国際的な仕事を体験してみたい、という思いを抱いて来る学生がほとんどです。ところが、実際にそのような経験をしたところ、足下（日本のことや国内の地域社会のこと）を知らない、説明できない事態に直面して、はたと我に返ったり、身近な地域コミュニティの場で国際化の波が押し寄せている事例に出会って、関心の対象が変わったり、といった学生や院生が私の研究室には多かったからです。

私自身は、たとえば東アジア地域や西ヨーロッパ地域といったように、国家を超越した存在として地域を捉える認識を持っているつもりです。しかし、実際のところ、研究面でも教育面でも、狭い意味での地域、たとえば、東北地方など国内における複数の県からなる地域から、県、市町村、地区、さらにはコミュニティや近隣などの地域を取り扱ってきました。

このようにして、気がつけば大学教員としてベテランの域に差し掛かった頃、本格的な大学改革の波が押し寄せて来ました。昨年度から国立大学は大きく、①世界最高水準の教育研究、②特定の分野で世界的な教育研究、③地域活性化の中核、の三グループに分類されました。宇都宮大学は③を選択しました。その具体的な改革が地域デザイン科学部という新しい学部を設置する構想でした。

新学部設置のための書類作成には、時には投げ出したいと思うほど相当なエネルギーを費やしたことは事実です。辞書編纂を題材にした「舟を編む」という映画を思い出したほどです。しかし一方で、研究者として、また教育者として大変やりがいのある環境を与えてもらったという思いもあります。

といたしますのは、行政学など私の担当する科目は今後とも国際学部生は受講するでしょうし、何よりも研究室を媒介に学部横断的な教育に従事できる機会を得たということです。私の所属学部が変わったとはいっても、今の国際学部 3 年生のゼミ生は、来年度 3 年生になる新学部のゼミ生を後輩に持つこととなります。そして、新学部の今の 2 年生（1 期生）にとっては、研究室活動において国際学部の先輩と接する貴重な機会を持つこととなります。さらに、大学院改革も本格化していますが、これまでの指導の経験を生かすことができます。したがって、今後とも地域に関心を持つ国際学部の学生とのやり取りを続けていくと思われまます。

これまで20年以上にわたって、授業などでみなさんと接してきた経験から国際学部の卒業生、大学院国際学研究科の修了生についての特徴や強みとして、確信を持って言えることが三つあります。

一つ目は、自分の立ち位置を把握できる力です。これは、課題に直面した時にいったん立ち止まって、全体の広い状況の中で大きな視野でもって、自分を位置づけようとするスタンスを持っているということです（立ち位置把握力）。

二つ目は、他者や他の世界、つまり自分と異なる考えの持ち主や自分とは異なる世界とも積極的に関わっていこうとする力です。人や地域や世界とコミュニケーションを図ろうとする姿勢を持っていることです（多面的コミュニケーション力）。

三つ目は、自分の道を自分で切り開いていこうと開拓する力です。自分の幸せを自分で掴むんだという姿勢・勇気を国際学部のみなさんは持っています（自己開拓力）。

ぜひ、自信を持って今後ともみなさん一人一人のチャレンジを続けてください。私もみなさんの奮闘ぶりを思い浮かべながら、それを日々の力にさせてもらいます！

（2017年11月28日原稿受理）

博士録 44 第22号から今後の博士誕生を鑑み、新コーナーを設けました。

知究人 32 第9号から特に、国際学部出身者で他大学院へ進学された方に、寄稿をお願いしたコーナー（**ちきゅうびと**）を設けました。

「私の夢」

神戸市外国語大学大学院 外国語学研究科 修士課程 日本アジア言語文化専攻
日本語領域1年 **李 岩軍**

私は2013年4月から、2017年3月まで宇都宮大学（以下、宇大）の国際学部で勉強しました。宇大に入ったばかりの頃はいろいろ大変でしたが、優しい先輩や国際学部の先生方のご支援のおかげで日本の大学生活に慣れました。国際学部は想像以上にいいところで、国際社会・文化に関する事はもちろん、言語や芸術の領域も習うことができ、幅広い基礎知識を身に付けました。3年生の時、佐々木一隆先生の言語学のゼミに入りました。チョムスキー（1928-）を代表とし、生成文法から、認知言語学まで学ぶことができ、毎日充実していました。そのうち、日本語の文法と日本語教育に強く興味を持ち始め、大学院に進学することを決めました。佐々木先生と相談した上で、日本語文法の専門家が集まっている神戸市外国語大学大学院外国語学研究科・日本アジア言語文化専攻の修士課程に出願し、幸いに合格しました。

神戸市外国語大学の日本アジア言語文化専攻はさらに三つの領域に分けられています。日本語領域では、現代語を中心とした文法研究、音声・音韻の研究、日本語の教育方法の研究

究と外国語との対照研究を行っています。日本文化領域では、中・近世の日本絵画史と現代の歴史社会学の研究を進めています。アジア言語文化領域では、チベット・ビルマ系言語の歴史・社会言語学的研究と、東アジア・東南アジアの諸言語の記述言語学的研究と東南アジア大陸部北部地域の諸言語の地域言語学的研究を行っています。

日本語領域に属している私は、認知言語学と日本語教育について研究しています。従来の言葉の形式・構造に目を向けていく文法中心の言語学研究に対して、人間の知のメカニズムの解明にかかわる認知科学のパラダイムを背景とする認知言語学の研究が注目を集めています。認知言語学の大きな特徴は、認知と言語、言語と思考、言語と行動、言語と文化というように、人間の認知的活動から言語を捉えなおすというものです。先行研究により、認知言語学におけるプロトタイプ理論、イメージスキーマ、概念メタファーなどの知識は、言語習得や言語教育に有益な示唆を与えています。私の研究目的は、留学生が日本語を習得する初級の段階によく見られる文法誤用から始め、その理由を認知言語学の視点から分析して、その結果を日本語教育に生かしていく可能性を探っていくことです。

私は中国で自分の理想とする言語学院を作り、中国人に質の高い日本語教育をしたいという夢を持っています。中国の現在の日本語教育制度はまだ満足すべきものではなく、より良い日本語教育の環境作りは将来的に不可欠とのことです。そのためには、大学院で認知言語学や日本語教育学の知識と日本語文法をさらに深め、夢を実現できるように頑張ります。

(国際学部 国際文化学科 第19期卒業生)

(2017年10月30日原稿受理)

「国際学部から教師を目指して」

東京学芸大学大学院

吉田 香

宇都宮大学国際学部国際社会学科卒業生の吉田香と申します。宇都宮大学の国際学部が国立大学では唯一の国際系の学部であったことから、宇都宮大学に進学しました。卒業後は教師になることを目指し、国際学部在籍時には高等学校の地理歴史科の教員免許を取得しました。現在は、東京学芸大学大学院教育学研究科総合教育開発専攻国際理解教育コースというところで勉強を続けています。

東京学芸大学は、教育学部のみ単科大学であり、したがって大学院も教育学研究科が唯一の研究科です。社会科や国語科など教科教育を研究する専攻がある一方で、私の在籍する総合教育開発専攻は、人文科学や社会科学の諸分野を専門とする先生方が集まっている専攻です。東京学芸大学の中では少し異質な専攻ですが、様々な分野の知見をもとに研究を進めるスタイルは、「学際性」をキーワードとする国際学部ともどこか似通っている

部分があるように感じています。

私は、学部在籍時に書いた卒業論文から一貫して人権教育を研究分野としています。その理由は、紛争や差別などさまざまな地球的課題において人権という視点は不可欠であり、教育においても重要なテーマだと考えているからです。大学院では、日本に住む外国にルーツを持つ子ども達の抱える課題や支援について、人権教育の観点から、現地に足を運び、実際に子ども達と接しながら研究しています。

進学先として東京学芸大学を選んだのは、先述したように、教師を目指していることが大きな理由です。現在は研究を進めると同時に、教育学の理論や授業実践の方法論など、教師としての資質を高めるための授業も履修しています。こうした授業では教育学部出身の学生や現職の先生などと一緒になることが多いので、教えるということや、「教育」に対する知識や技術、情熱にはしばしば圧倒されています。しかし、この環境で勉強できることは、東京学芸大学に来て良かったと感じる部分です。また、中学校社会科の教員免許取得のために、来年度には2度目の教育実習を予定しています。

一方で4年間を過ごした宇都宮とは異なる環境に戸惑う場面も多くあります。研究を進めるうえで、また教師を目指すうえで、今の自分には足りない部分が多くあることも日々痛感しています。ですが、自分で選択した進路なので、振り返ることなく成長するという思いで毎日を過ごしています。

これからも、国際学部で学んだことを十二分に活かし、自分の理想とする教師像に向けて、学業に取り組んでいきたいと考えています。

(国際学部 国際社会学科 第19期卒業生)

(2017年12月1日原稿受理)

海外だより 25 第27号から国際学研究科、国際学部出身の海外在住者からの寄稿をお願いしたコーナーを設けました。

「日本への留学および私の近況」

サ ソチア

ロータリーの支援で叶った夢

ロータリーとの出会いは留学前です。長い内線が終わっても再建が進まないカンボジアの状況を見て、「第二次世界大戦に奇跡の復興を遂げた日本について学び、母国の発展に生かしたい」と思い、大学入学後に日本語の勉強を始めました。そして、高梁ロータリークラブがカンボジアに設立した小学校・高校で2年間、日本語を教えることになり、その後、高梁ロータリークラブのおかげで、日本に留学することができたのです。

修士課程を修了後、まだ能力不足と感じ、博士課程に進学することにしました。宇都宮大学大学院の博士後期課程に進学し、今度は米山奨学生として、再びロータリーの支援を受けました。最も心に残ったのは、ロータリークラブの例会で学んだ「四つのテスト」です。宇都宮東ロータリークラブの皆さんと交流するうちに、これが重要な経営理念であること

に気づき、今の仕事でもこの言葉を大切にしています。カウンセラーの辻さんからは、“第2の親”と思えるほど、親身に面倒を見てもらいました。お正月に自宅に招いてもらい、旅行に連れて行ってもらったり、問題解決のアドバイスを受けたりもしました。博士号を取得したのは、辻さんと宇都宮東ロータリークラブの皆さんのおかげです。

宇都宮大学大学院在学中の指導教員方々からの恩恵

宇都宮大学大学院の博士後期課程に進学し、多くの外国人学生と勉強しているうちに、自分は能力が低く、修了できないかと心配でした。しかし、宇都宮大学国際学部の磯谷玲先生の指導の下で、私は多くのアドバイスを頂き、やる気が出ました。博士論文を作成するにあたり、主旨導教員の磯谷玲先生から、大変丁寧かつ熱心なご指導を賜りました。終始精細にご指導、多大なご助力をいただきました。磯谷玲先生のご指導なしには博士論文を完成させることができませんでした。指導を通じて大きなお力添えにあずかりました副指導教員の内山雅生先生と鎌田美千子先生にも感謝申し上げます。そのほかに、アドバイスをくださった重田康博先生には審査の過程で大切な助言をいただきました。また重田康博先生はカンボジアについて研究しており、カンボジアからの私にはいつでもご丁寧にアドバイスしてくださいました。

自らサポーターとなり社会に貢献を

修了後に帰国し、在カンボジア日本国大使館に勤めた後、2014年9月から、パニャサストラ大学の日本語・ビジネス研修センター所長兼大学教員として勤務しています。日本で経験したことを学生たちに伝えて留学を後押しし、日本とカンボジアとの友好を深める懸け橋の役割を果たす、やりがいのある仕事です。

現在、当センターで日本語を学ぶ学生は250人ですが、今後も増えていくと思います。いずれは当センターを高度な人材開発センターへと成長させると同時に、学生たちと一緒にさまざまな社会貢献活動をしていきたいと考え、「日本カンボジアソーシャルデザイン」という学生クラブを立ち上げようとしています。さらに、私自身はいつもお世話になっている重田康博先生を通じて、宇都宮大学国際学部附属公共圏センターと協力し、両センターの交流活動を設けて行きたいと考えています。重田先生とは年に2回プノンペンで面会しており、さまざまなことを相談したり、アドバイスを頂いたりして、いい関係を維持しています。

これまで、日本人の皆さん、ロータリーの皆さんからサポートを受けてきた私が、これからはサポーターそして、社会のため、次世代のために何ができるかを考えています。「自分や家族の幸せだけでなく、ほかの人の幸せも考えなければ、真の幸せではない」。このことを胸に刻み、実践していきたいと思います。

(国際学研究科 博士後期課程 国際学研究専攻 第2期修了生)

(2017年12月5日原稿受理)

海外留学今昔 21 第 35 号から国際学部出身者および在学者を中心とした海外留学体験の寄稿をお願いしたコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**海外留学経験者**および**海外留学中の在学者の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

「王立プノンペン大学（カンボジア）留学体験記」

国際学部国際社会学科 4 年 本田 みのり

私の住んでいたプノンペンはこちら数年発展ぶりが著しく、特に中国や韓国の資本による開発(主にビル建設)が盛んです。また、2014 年にできたイオンモールを始め、中心街にはカフェやファストフード店、アパレルショップなどが軒を連ねており、どこも休日になると多くの家族連れや若者たちで賑わっています。インターナショナルスクールや英語塾の数も多く、プノンペンに住む学生の中には幼少時からそこへ通う人も多いため、多少の訛りはあっても英語を大変流暢に話します。

昨年 9 月から約 1 年間通っていたプノンペン大学では、日本の高等学校までのように予め時間割が決められていて、クラスに入って授業を受けるという形態になっています。また、授業は午前の部、午後の部、夜間の部と 3 つに分かれていて、そこから 1 つ選択することができます。ちなみに私が受けていた午前の部の授業は朝 7 時半から始まるので、平日は早起きが大変でした。前期は 3 年生、後期は 2 年生のクラスに入って国際法や政治思想、そして ASEAN 内での国際関係などの授業を受けていましたが、授業はどちらの学年も予想以上に難しく、教科書の内容や先生の話を理解するのもかなりの時間がかかりました。それでもクラスの友達がわかりやすく説明してくれたり、先生方も私に配慮して授業の進め方を工夫してくれたりしたので大変助かりました。特に私が学んでよかったと思った教科は、2 年生クラスでの ASEAN in regional and global contexts という授業で、ASEAN の中での国際関係について幅広く分野を扱っていたので、日本で詳しく知る機会がなかった分、授業では毎回驚きの連続でした。

また、私は大学の授業以外にも、カンボジアの現地語であるクメール語を勉強していました。特にクメール語は文字の書き方や読み方が非常に複雑で、諦めようと思ったことが何度もありました。しかし、市場や地方へ行く時はなるべくクメール語で話すなど、日常生活の中で少しでも語学力を上げようと努力しました。その甲斐あってか、習い始めてから 3,4 か月後にはクメール語授業で使う教科書の文章の内容がだいたい理解できるようになりました。カンボジアにあるバタンバンという州で、3泊 4 日で一人旅をしたことがあったのですが、出会う人達はたまたま皆英語が話せなかったもので、滞在中はほぼずっとクメール語で過ごしていました。それでも現地の人たちの優しさをより強く感じ、心の距離もグッと縮まった気がしたので、習っていて本当によかったと今でも思っています。旅行でカンボジアを訪れる人たちにも、会話だけでも十分なのでクメール語に触れることを強くお勧めしたいです。

最後になりますが、これらをはじめ、留学期間中の何もかもが私にとって貴重な経験でし

た。そして留学において支援して下さった国際交流課の皆様、並びに友人や家族、大学の先生方、その他関係者の方々に厚く御礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

(国際学部 国際社会学科 第4年次在学学生)

(2017年8月21日原稿受理)

「私に大切なことを気付かせてくれた貴重な1年間の交換留学」

飛田 拓実

こんにちは。宇都宮大学国際学部国際社会学科4年生の飛田拓実と申します。私は大学の交換留学制度で、カンボジア王立プノンペン大学に1年間交換留学していました。カンボジアといえば、1975年から1979年にかけて当時の指導者ポル・ポトにより国民の1/3が大量虐殺され、1991年まで内戦が続いていた国です。私たち日本人からすれば、カンボジアは「貧困」、「飢餓」、「発展途上国」といった言葉が出てくるとと思いますが、実際に行ってみるとポジティブな面が沢山ありました。ここでは私のカンボジアでの暮らしと留学での経験をどのようにこれから生かしていきたいかを紹介します。

まず派遣先の大学についてですが、10か月間、週5回、毎朝7:30~11:00まで通っていました。大学では主に英語での授業を履修し、国際法や国際経済論、英語でのエッセイの書き方、英語文学の授業を履修していました。カンボジアの大学は基本的に3部制で、朝の部:7:00~11:00、午後の部:14:00~17:00、夜間の部:17:30~20:30と3つに分かれています。そして多くの学生は朝の部と夜間の部の2つの大学に通っており、勉強に熱心な学生が多くいます。私が一緒に勉強をしていた学生はカンボジアの中でも優秀な学生が多く、小学校からインターナショナルスクールに通っている友達が多かったため、英語に関しては不自由ない学生ばかりでした。彼らは日本の小中学生のように物凄く明るく、現在発展が著しいのが国民性にも出ていると感じました。

授業後は、他大学で開かれている日本語コースで日本語教師のアルバイトをしていました。そこで、カンボジアの大学生がいかに関心があるのか、カンボジア人が日本に対してどのような印象を持っているのかが分かりました。また自分が普段使っている日本語がいかにも難しいもので、日本人もいかに間違った日本語を普段生活する上で使っているのかが気付きました。ここにいる学生の多くは、将来日本に留学し、そこでの経験を生かして日本語を使った仕事をしたい、と考えている学生が多くいました。私は今まで日本に生まれ育ってきたにも関わらず、日本についてあまり考えずに育ってきたことを実感し、自分の国についてより深く考え、それを学生に伝えていくことの必要性を感じました。

私は今回の留学を通して、初めて外から日本を見て、日本に対する印象、日本の進出している企業を見てきて、自分が最も大事な自分の国について知ることを疎かにしてきていたかに気付きました。私はこの留学を生かして、この気づいたことを忘れないようにまず

はとことん日本のことを調べ、追及していきたいと思っています。これ程の素晴らしい体験をさせてくださり、大切なことに気付かせてくださった、宇都宮大学、王立ブノンペン大学の皆さんに深く感謝を申し上げます。そしてこれから留学を考えている皆さんの参考に少しでもなれば幸いです。

(国際学部 国際社会学科 第4年次在学)

(2017年9月27日原稿受理)

学生サロン 12 知求会ニュース第41号より現役学部生によるコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**現役学部生の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

「ナムチャイ」

田畑 達也

みなさんこんにちは。ナムチャイ代表をさせていただいております、国際社会学科2年生の田畑達也です。今回、ナムチャイについて寄稿させて頂く機会を頂き、ありがとうございます。この機会に、ナムチャイの現在の活動と今後について、ご報告しようと思いません。

私達ナムチャイは、宇都宮大学(以下、宇大)の国際協力系サークルとして2006年に認定され、以来タイの東北地方にあるシーサケット県の貧困農村地域に暮らす児童生徒に対し、奨学金支援と絵本を送る活動を行っています。ちなみに、「ナムチャイ」とはタイ語で「思いやり」という意味です。

ナムチャイの2つの大きな柱は、奨学金支援と、タイ語に翻訳された日本の絵本を贈る活動です。奨学金は大学祭や宇都宮市内のイベントでタイ料理を販売して得た収益を元にしており、特に大学祭では「タイカレーのところ」といえば通じる程、ナムチャイのカレーの美味しさは宇大中に知れ渡っています。絵本を贈る活動は、ナムチャイが結成される前の1998年から始まっています。長年ナムチャイを支えて下さっている泉田スジンダ先生(以下、姓略)が開講されている「タイ語文章表現」という授業の中で、日本の絵本をタイ語に翻訳するのですが、そこで翻訳された絵本をタイの小学校に寄贈しています。2月のタイ訪問では、支援先の小学校を訪問し、支援金と絵本の贈呈の他にも、子ども達とのふれあいや村の家庭訪問も行っています。昨年はNGO訪問も行い、ドゥアン・プラティープ財団(本部 バンコク)にてお話を伺いました。加えて、今年は新たな活動として、宇都宮市内で開催されたサマースクールにて小学生向けにタイという国や私たちの支援先での経験についてお話をしてきました。日本の小学生とタイの貧困地域で暮らす小学生はどのように違うのか。実際に経験してきた私たちの言葉で語ることで、日本で暮らす子ども達にも世界の様々な状況に目を向けるきっかけを作れたような気がします。他にも活動の幅を広げるべくアンテナを張っています。

ナムチャイの活動11年目を迎える今年は、スジンダ先生が定年退職される前の最後の年

であり、新たな一步を踏み出すという意味でもとても重要な年です。タイ料理を作る上でも、タイ訪問を行う上でも、スジンダ先生には、言語など様々な面でご支援いただきました。私たちの活動は、日本で活動するナムチャイメンバーだけでなく、支援先のタイで暮らす人々との双方によって成り立っています。自分たちだけでなく、相手の存在があることによる責任の重さはとても大きく、来年からの活動を考えると、スジンダ先生の存在がいかにナムチャイにとって大きいものかを実感します。正直なところ、今後スジンダ先生のご支援がなくなってからの活動についてはまだ明確な答えが出ていません。

しかし、「学生による国際協力」という考えを中心に据え、サポーターの存在がなくても、活動していけるナムチャイを目指したいと考えています。それでも今後の活動において、皆様に何かしらの形でご支援をお願いする機会があるかもしれません。その際は快いご支援をいただけるとありがたく思います。

「学生である私たち」ができる範囲を把握し、「学生である私たち」だからできる活動を新たに見つけるべく、模索し続けていきたいと思えます。

(国際学部 国際社会学科 第2年次在学)

(2017年10月26日原稿受理)

キャリア指南12 現役学部生に向けた企画として、宇都宮大学全学部から国際機関をはじめ、NGO・NPO や企業などで活躍する先輩方に執筆していただくコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**キャリア指南にふさわしい卒業生の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

フォーラム 2017年の師走を迎えて、皆様忙しいことと思えます。(原稿集めに苦勞しています。)

「広島大学大学院」

ロニー・ヴァルガス ヴィジャロボス

私は、宇都宮大学国際学研究科博士前期課程国際交流研究専攻を修了したロニー・ヴァルガス ヴィジャロボスです。今年の4月から広島大学大学院博士後期課程国際協力研究科(IDEC)に進学しました。

本研究科は、開発科学専攻と教育文化専攻に分類され学祭的な研究を実施します。具体的に、開発政策コース、開発技術コース、平和共生コース、教育開発コースと文化コースの5コースに分類され、私は開発科学専攻の平和共生コースの1年目に所属しています。

広島大学は、東広島、東千田と霞キャンパスに分かれ、私は一番大きい東広島キャンパスに通っています。

平和共生コースでは、教授6名の下で国際政治学、協力外交論、平和と紛争研究、平和学、平和構築論と国際安全保障論の分野を研究することができます。多様な分野の研究以外にアフリカやアジアを中心に多国籍から構成されるコースは多様的で学際的な環境を生

み出します。

私の研究室には国籍が異なる 7 人が所属しています。ミャンマー、バングラデッシュ、パキスタン、メキシコ、コンゴ、日本と私の国籍であるコスタリカです。8 人目となる学生は、現在 1 年間スリランカで研究していて来年初めに戻ってきます。

私の研究テーマはDDR(武装解除・動員解除・再統合)についてです。DDRとは、武力衝突発生後に適用される正式なプロセスです。特に、市民戦争等の国またはローカルレベルの内線の時に適用されます。DDRの目的は、平和構築、社会経済的復帰の土台の創設と将来的な内戦の回避です。このプロセスの名前は、その名の通り武力解除、動員解除と社会復帰を主要な目的としています。

私の研究は、DDR全体のプロセスですが、特にそのプロセスの内容や研究対象としてあまり焦点があてられてこなかった再統合を主要なテーマにしています。軍隊が存在しない国から来日した私にとって、広島という人類が悲惨な経験をした町で平和の研究を開始できることを誇りに思っています。

指導教授からの個人的な指導、個人的な研究、他の学生や専門家とのディスカッションを通して、永続的な平和構築と関連プロセスの制限の更なる理解を深める理論的な貢献ができればと考えています。

(国際学研究科 国際交流研究専攻 第12期修了生)

(2017年11月28日原稿受理)

*編集および翻訳協力：国際学研究科博士後期課程在籍の小波津ホセさんにお世話になりました。

「やさしい日本語」について

国際医療福祉大学国際交流センター

神山 英子

「やさしい日本語」に関する記事が今年11月19日に下野新聞の一面に載ってから、「やさしい日本語」について話す機会が増えました。栃木県産業労働観光部国際課でも力を入れているようで、栃木県でもその理念が広まってきた印象を受けています。

「やさしい日本語」とは、普通の日本語よりも簡単で、外国人等にもわかりやすい日本語のことです。1995年1月に起きた阪神・淡路大震災で、必要な情報を受け取ることができなかった外国人が多数いたことから考え出されました。

その後、災害時の「やさしい日本語」から市役所などの公的機関、観光業にも広がりを見せています。

私は1993年から1994年にかけて、宇都宮市から友好都市である中国黒龍江省チチハル市に語学研修生として派遣されました。派遣前から中国語を学んではいたものの、日本人が一人もいない環境の中で、中国語が話せないことがストレスとなっていました。そのような状況の中、チチハル大学の中文科の教授が「やさしい中国語」でいろいろな話をし

てくれました。その教授は学生たちにも私に「やさしい中国語」で接するように言ってくださいました。「やさしい中国語」のおかげで、コミュニケーションを取れるようになったこと、中国語の音声や文法が身についたことは本当にありがたいことでした。母語話者がやさしく話すことが、第 2 言語の学習に繋がるということを経験できたことは、私の宝です。

帰国後、日本語教師となり、日本語学習者にはそのレベルに合わせた「やさしい日本語」を自然に使えるようになりました。そして、外国人住民が増えている状況ですから、日本語教師ではなくても、多くの方々が「やさしい日本語」を使って外国人とコミュニケーションが取れるようになればいいなと思っていました。

「やさしい日本語」に仕事として携わったのは、一橋大学の庵功雄先生のご研究の一端としてお引き受けした「やさしい日本語書き換え作業員」として公的文書をやさしい日本語に翻訳したのが初めてでした。その後、宇都宮市役所、栃木放送のやさしい日本語の原稿等、携わる機会が少しずつ増え、現在に至っています。

今年度は「要約筆記」と「やさしい日本語」をリンクさせた講演ができたことが私にとっては大きな出来事でした。「要約筆記」とは聴覚障害者に対する情報保障の一つで、話の内容をその場で文字にして伝える作業です。「やさしい日本語」とは異なる点もありますが、共通点も多く、たいへんいい経験になりました。そして、2013年に初めて担当した宇都宮市職員向けのやさしい日本語の研修が現在も続いていること、新たに栃木市役所でもやさしい日本語の研修が始まることに感謝しております。

今後も、「やさしい日本語」は外国人住民のためだけのものではなく、日本人住民のためのものであり、お互いの歩み寄りのための一つの考え方だということを広く伝えていきたいと思っています。

(国際学研究科 国際社会研究専攻 第7期修了生)

(2017年12月5日原稿受理)

●お願い—宇都宮大学3C基金への寄付に関して

4月に大学から「宇都宮大学3C基金」寄付への協力要請を受けています。詳細は以下のアドレスへアクセスしてください。http://www.utsunomiya-u.ac.jp/fund/3c_kikin.php
なお、海外からでも寄付ができる方法がありますので、よろしく願いいたします。

New

東南アジア支部だより

第63号から、タイ在住の**大畑美優紀**さん(国際学部社会学科第1期生・国際学研究科国際社会研究専攻第1期期生)が発起人となり、国際学部同窓会および大学院国際学研究科同窓会の東南アジア支部としてニュースレターを創刊しました。第2号の主な内容は以下の通りです。1. 同窓会関連報告 2. 宇都宮大学サテライトオフィス誕生 3. タイ国

宇都宮大学同窓会発足 4. 懇談会報告 5. 新規メンバー紹介 6. 同窓生インタビューリレー 7. タイの昨今 連載コラム ～教育事情 No.2～ 東南アジア地域在住の同窓生は積極的に声を掛け合っていたりすることを祈念しています。

EU 支部だより

第 38 号からイタリア在住の松原真実子さんによる知求会 EU 支部だより「Newsreel World」を発行してきました。今回の 24 号の内容は、1 イタリアのスタートアップが開発 2 EU 支部だより ーベファーナーです。配信方法は、画像が掲載されているために別便で配信します。ファイル容量が大きいことで、ニュースレターが受信できない場合にはその状況をお知らせください。

編集者のひとりごと

●今号の隠しテーマは「カンボジア」です。過去・現在・未来に通ずる記事が掲載できました。過去は、冒頭の石澤良昭先生のラモン・マグサイサイ賞受賞に始まり、現在はサ ソチアさんの「海外だより」、未来は国際学部生による「海外留学今昔」に寄稿いただいた本田みのりさんと飛田拓実さんの感性豊かな文章をご堪能いただき、国際学部同窓会・国際学研究科同窓会東南アジア支部のニュースレターと関連付けてご一読いただければ幸いです。

●「フォーラム」コーナーに寄稿していただいた神山英子さんの「やさしい日本語」を切掛けに、知求会OB・OGを主体にした「日本語教育研究懇談会」の開催を模索しているところです。将来は、「日本語教育研究会」へ発展させていければと考えています。なお、現在多くの修了生が、それぞれの居場所で孤軍奮闘されています。同窓会の役割は、「点を、線に、そして面へ」と連携させることではないかと感じています。EU 支部および東南アジア支部と連携して、一歩前進した活動を来年以降の目標としていきたいと思えます。皆様のご理解、ご協力をお願いします。

さて、知求会ニュースも、無事 16 年目を配信することができました。これまでの原稿執筆者の皆様、本当にありがとうございます。Season's Greetings! 皆様、よいお年をお迎え下さい。

編集後記：2010 年 4 月 26 日から 知求会ニュースのバックナンバーは 国際学部同窓会 HP (<http://www.afis.jp>) で見られるようになっていきます。

同窓会会員の皆様へのお願い：住所、勤務先および携帯電話番号、メールアドレスの変更の際は事務局へメールして下さい。 chikyukai@freeml.com